

豊後高田の 偉人たちを訪ねて



塩谷大四郎像と呉崎新田絵図

平成27年10月24日(土)
豊後高田市教育委員会

(1) 本日の行程

08:45 豊後高田市役所高田庁舎東側駐車場 集合、受付

09:00 バス(真玉・スクールバス)で出発。

09:05 高田城【高田城の城主たち】

・高田氏について ・柴田礼能について ・竹中氏について ・堀や土塁

09:35 出発

09:45 興隆寺【塩谷大四郎】着

・呉崎新田検地帳【県指定】 ・塩谷大四郎について

10:25 出発。

10:30 酢屋【佐藤直造】着。

・佐藤直造について

10:50 出発。

11:00 応暦寺【安藤国恒】着。

・安藤国恒について ・応暦寺石造地藏菩薩立像【市指定】

・安藤国恒作馬頭観音石仏

11:20 出発。

11:40 昼食(於香々地)。

12:30 出発。

12:50 吉田光由の墓【吉田光由】着。

・吉田光由について ・吉田光由・渡辺藤兵衛の墓【市指定】

13:10 出発。

13:40 佐野鞍懸城【田原親貫】着。

・田原親貫について ・佐野鞍懸城

14:40 出発。

15:00 長円寺【井上平四郎】着。

・井上平四郎について ・玉ノ井水路

15:20 出発。

15:25 高田庁舎着。

豊後高田市は、古くは六郷満山寺院の修行の場としてひらかれ、吉弘氏をはじめとする武士の時代を経て、やがて昭和の町として繁栄しました。

昨年の大河ドラマで活躍した戦国武将・吉弘統幸や、8月の市報で紹介された史上唯一アメリカ爆撃を成功させた藤田信雄、図書館で企画展示をしている教育の町の礎を築いた涵養舎の鴛海量容といった人物は、少しずつ知名度が上がってきています。

しかし、今日の豊後高田市をつくりあげた“偉人”は、これらの人だけではありません。

今回のバスツアーは、豊後高田を誇る偉人達の足跡が残る場所をめぐりながら、偉人達の偉業やドラマに触れる旅にしたいと思っています。

【今日とりあげる偉人たち】

- ・柴田礼能 (戦国武将)
- ・塩谷大四郎 (開拓者)
- ・佐藤直造 (政治家)
- ・安藤国恒 (仏師)
- ・吉田光由 (数学者)
- ・田原親貫 (戦国武将)
- ・井上平四郎 (開拓者)



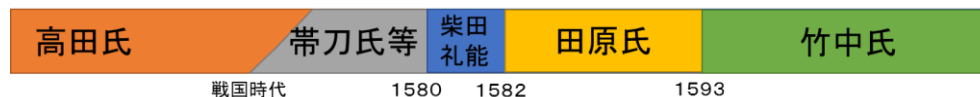
高田城の遺構について

豊後高田市を代表するお城、高田城——。中央公民館傍の石段と石垣が有名ですが、小ぢんまりしたのは島原藩の飛び地になって、“高田陣屋”とされてからで、元々は地図でもハッキリ見えるような巨大な城郭でした。

現在の遺構のほとんどは、中部地方の技術で造った織豊系の特徴を持ったものであり、豊臣家臣・竹中氏が入部してから大幅に改変されたとされます。



高田城主の変遷



2年間だけ高田城主となった柴田礼能

柴田礼能は、田原親貫の乱の際に、宗麟の次男・田原親家の側近として国東に下向し、帯刀氏の後に高田城と臼野を任されています。豊後一の槍の名手で、宣教師からは「豊後のヘラクレス」と呼ばれました。ただし、2年後には宗麟から大分市元町に屋敷を与えられ、府内城下のまちづくりを任せられ、現在の大分市の基礎を作りました。各地の戦でも活躍し、宗麟より杏葉紋の使用を許可されています。息子・統勝も宗麟の秀吉謁見にも帯同するなど役目を果たしています。最後は島津氏に降った兄・紹安のせい逆心を疑われた事を恥じ、統勝と共に島津軍に突撃して討死しました。礼能は洗礼名「リイノ」から。

江戸時代の新田開発ブーム

江戸時代になると、平和になったため、日本の人口は大幅に増えていきました。戦国時代末には、1000万人ちょっとだった人口は、江戸時代中期には3000万人ほどまで増加。各所で食糧難が発生し、幕府は新田開発を奨励しました。

日田代官・塩谷大四郎の呉崎新田開発

日田の西国筋郡代（天領を仕切る代官、一般に「日田代官」とも）であった塩谷大四郎は、遠浅で干拓のしやすい宇佐平野・豊後高田に目をつけました。大四郎は測量を続け、呉崎の地は大規模な干拓ができるかと睨み、宇佐の干拓事業で功績のあった広瀬久兵衛に呉崎新田の開発を任せました。工事は33万人、3年の年月をかけて進められました。



広瀬久兵衛肖像画

干拓事業関連の文化財

○呉崎新田検地帳及び関連絵図



○産土神社潮留の絵馬



中真玉の庄屋・佐藤家

佐藤家は中真玉の名士でした。醸造業をしていた事から屋号を酢屋といいました。現在に残る屋敷は、巨大な庄屋建築に増改築を繰り返し、近代のモダニズムが融合した独特の形式をしています。

江戸時代後期に、酢屋・佐藤家は私財を投じて潮留を行い、透留新田を開拓しました。また、芸術・文化も積極的に取り入れた佐藤家には、三浦梅園とのやりとりを示した古文書などが残っています。

この佐藤家に、真玉町の近代の基礎を作り上げた直造は生まれます。

～佐藤直造と木蠟～

秋になると鮮やかに紅葉する「ハゼの木」。その果実を蒸して压榨すると、ロウソクなどの原料となる「木蠟(燭蠟)」が採れます。江戸時代から有用な商品作物として西日本を中心に多くのハゼの木が植栽されました。豊後高田は木蠟生産の技術を島原藩から学び、江戸時代～近代にかけて盛んに木蠟生産が行われました。

直造は1878年(明治11)頃から四国などの先進地から、収量の多いハゼの木の優良品種を大量に取り寄せて栽培を進めます。これにより真玉地域では従来比3割増の木蠟を生産できるようになり、品質も向上し、農家の収益を高めることに成功しました。



(写真上): ハゼの木 / (写真下): 木蠟絞り機と、製品となった「生蠟」&「白蠟」



「法橋位」を授かった仏師たち

豊後高田市の仏像、とりわけ石仏には一つの画期があります。

江戸時代になると、六郷満山の寺勢は衰え、比叡山との交流もなくなってしまいます。そのため、仏師の技術も徐々に下がっていき、国東半島独特の仏像が生まれていきます。しかし、江戸時代の後半になると、真玉・香々地には比叡山に修行に赴き、優れた仏師などに与えられる法橋の位を得た仏師が現れます。

その一人である**安藤国恒**は、真玉地区を中心に多くの作品を残し、中でも応曆寺の地蔵菩薩立像は、巨大で、願いが叶う仏様として親しまれています。



安藤国恒作品集



福真磨崖仏石造覆屋



猪牟礼社石造大灯籠



江戸時代を通して最も読まれた書物「塵劫記」

幕末に日本を訪れた外国人が驚いたと言われるのが「日本人の識字率の高さ」であったと言われています。日本は藩校・寺子屋などにより、幅広い身分に対する教育が発達しており、幕末の頃の教育水準は欧米諸国をはるかに超えていたのです。

そして、江戸時代初期の数学教本「塵劫記」を著わした**吉田光由**という人物が香々地町・夷に住んでいたという史料があります。光由は京都の豪商角倉家の出身で、若い頃から数学の才があったとされ、数学や暦に関する本をいくつも書くかわら、私塾を開いて民衆に数学を教えていました。

『西国東郡誌』などによれば、光由は夷の風景を気に入ったようで、夷に移り住み、**私塾・稽古庵**（溪口庵）を開いて、弟子の**渡辺藤兵衛**と共に、夷の住民に数学を教えたようです。現在でも幾つかの家には「塵劫記」が伝わっています。

吉田光由の墓の謎

夷の台林という所に、伝吉田光由の墓が立っています。“伝”と付いているように、この墓は吉田光由の墓であるという証拠が少ないです（無銘）。

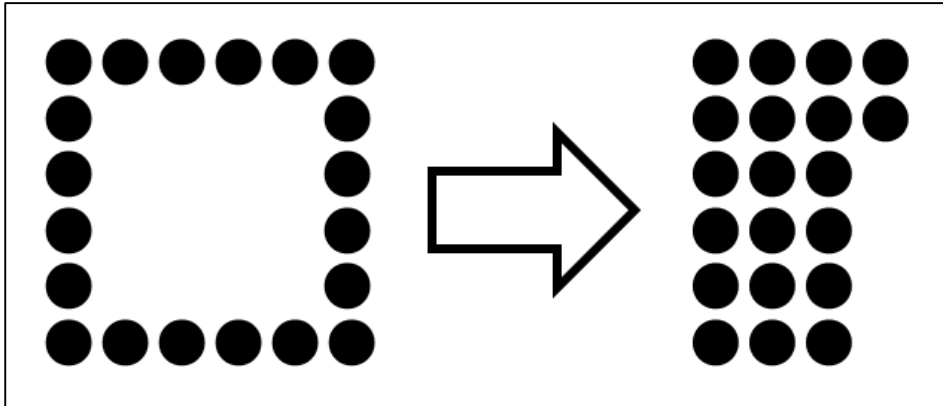
『西国東郡誌』によれば、光由の墓には『顯機圓哲居士』という戒名の他、『寛文12年（1672）』が入っていたとされ、渡辺藤兵衛の墓には同様に戒名・没日が書いてあります。更に戒名は香々地公民館所蔵の位牌とも一致し、少なくとも墓碑には文字が書いてあった可能性もあります。





【薬師算】

左のように四角く並べた丸薬を、右のように列をそのままに詰めていくと(四角形の一边に合わせて並び替える)、右上に余りが出てくる(下図では余りは2)。この余りが7つになるのは、一列の丸薬が何個の時か？



【布盗人算】

橋の下から布盗人の声が聞こえます。「7反ずつ分けると8反余る。8反ずつ分けると7反足りない。」盗まれた布の長さはどうか？



田原親貫の乱

南北朝時代より国東半島全域を治めていた大友分家の田原氏は、耳川の戦いの後にはその勢力は大友本家をしのぐ程になっていました。当主田原親宏は我が物顔で振る舞いは、宗麟の目にも余るものでした。

しかし、親宏には子が無く、香々地にも地縁のあった行橋の長野氏から末期養子・親貫をとり、後継としたのでした。親貫は10代であったと伝えられています。

天正8年になると親宏が病死。すると、宗麟は親貫が末期養子であり、大友本家との血縁がない事を理由に、親貫が田原家の跡を継ぐことを認めず、宗麟の次男・親家を、柴田礼能・田原紹忍らと共に国東半島に送り込ませます。

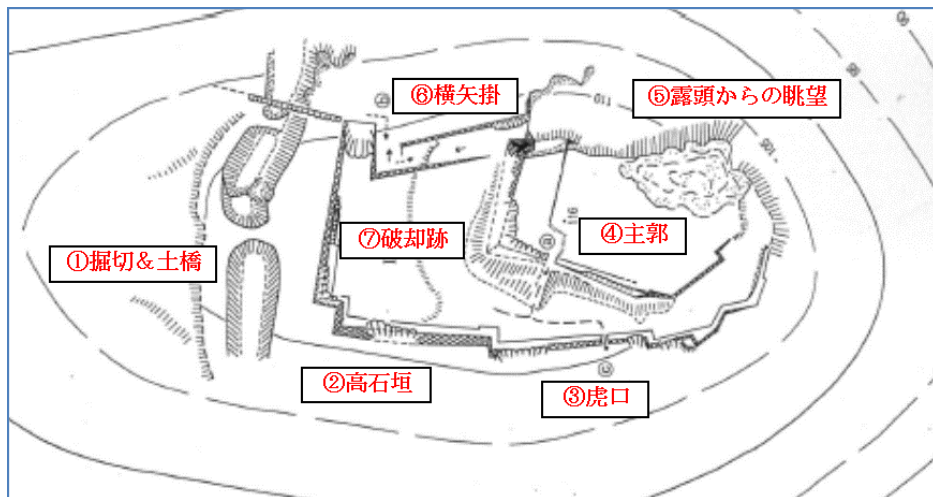
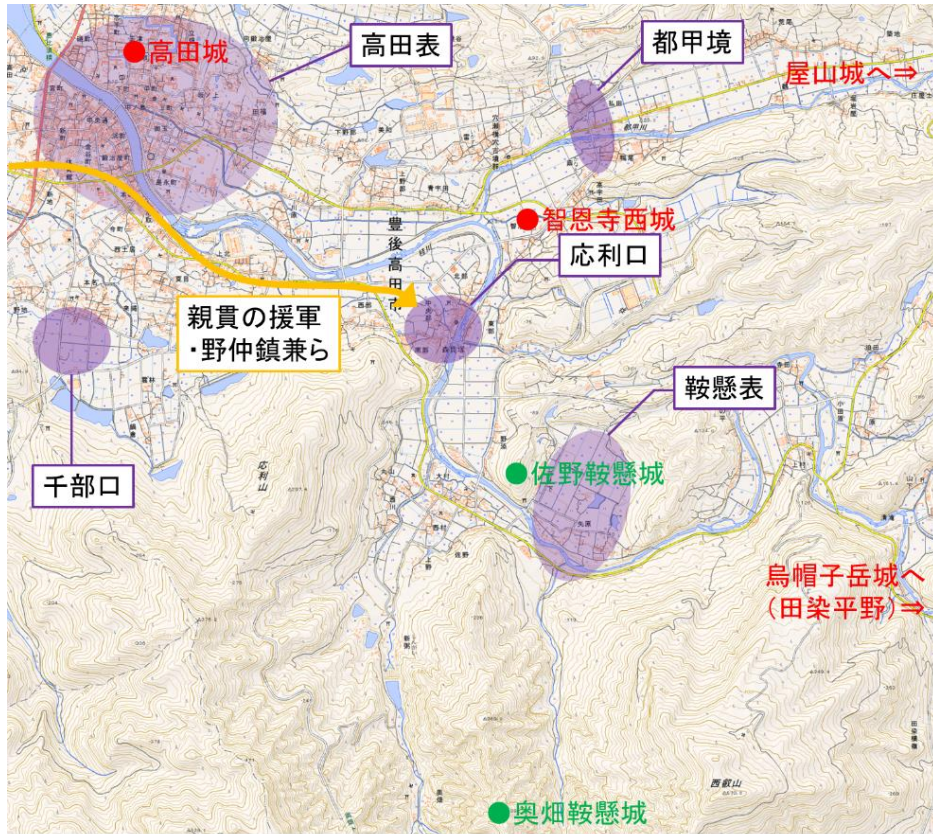
しかし国東半島の武士の多くは親貫方につき、10ヶ月にもわたる長期戦が繰り広げられるのです。

鞍懸城の戦い

田原親貫の本拠地は安岐城でしたが、安岐城は地理的な条件もあいまって、すぐに陥落してしまいます。

しかし親貫は籠城中に家臣・如法寺親武を使って鞍懸城の整備を行います。親武は「無類の才覚」によって鞍懸城を堅固な山城に仕上げました。細い谷の中に原が広がる地形(主戦場の矢原)、鞍懸城の見晴らしのよさから、親貫は有利に合戦を進めていきました。

吉弘統幸、田原紹忍、古庄鎮方ら大友家臣団が鞍懸城を包囲し、吉弘統幸の小屋焼討、河野弾正の夜襲の成功、高田での援軍撃退などにより、親貫を徐々に追い詰めていきました。そして10ヶ月後、鞍懸城はついに落城し、落ち延びた親貫は豊前で時枝氏に見つかって討たれたとされています。



3人の手で掘り抜いた水路

江戸時代の志手町は、川から遠く、崖があり、水の供給が不安定でした。

同村の井上平四郎は、圓福寺付近から水が湧き出ているのを見つけて、長い間歩（トンネル）を掘って志手町まで水を引こうと考えました。

しかし、手ノミで水路を掘ることは途方もないことでした。

また、水路の道筋からして、そのほとんどは暗渠（地上からは見えないトンネル）で、暗く狭い間歩の中で作業を続けなくてはなりません。その為、暗渠には「光取り」と呼ばれる横穴が多数掘られました。

何年もの歳月をかけて、水路が完成した際には、井上平四郎らの歓喜の声が響いたといえます。



本日巡る場所の紹介

高田城



現在の中央公民館に石垣が残る豊後高田市が誇る城郭。しかし、どんな人が城主だったかは、あまり知られていないような気がします。高田氏や竹中氏は何となく知っている方も多いと思いますが、天正年間に活躍した柴田礼能とはどんな人だったのでしょうか？

興隆寺・産土神社



現在は広大な田畑が広がっている呉崎新田。ネギや落花生生産で豊後高田市の農業を支えています。江戸時代後期までは海だったこの地区が、発展したストーリーを追いかけます。

酢屋



真玉の近代の礎を作った佐藤直造。その生家である酢屋からは、庄屋佐藤家の功績を今に伝えています。透留新田の開発、木蠟生産の推奨など、近世～近代の真玉町の歴史をなぞらえながら、直造の人物像に迫ります。

応曆寺



真玉・香々地のお寺には、地方色豊かな石造物に混じって、ちょっと京都風の石造物が散見できます。それらを作ったのは、江戸時代後期に現れた法橋位を授かった三人の天才仏師でした。

吉田光由の墓



江戸時代で一番のベストセラーって何でしょうか？それは『南総里見八犬伝』でも、『太閤記』でもなく、『塵劫記』と呼ばれる算数の指南書でした。教育の町豊後高田市が誇る数学者、吉田光由からの挑戦状。あなたは何か問解けますか？

佐野鞍懸城



天正8年、国東半島を揺るがした田原親貫の乱。反乱の首謀者、親貫は鞍懸要害（城）に籠りました。垂直に伸びる石垣は、大友軍をことごとく退け、10ヶ月にも及ぶ戦いの舞台となりました。

長円寺（玉ノ井水路）



おびんずる様で有名な長円寺。その裏手には1人がやっと入れるような穴があります。井上平四郎は、水不足で困っていた志手町への長いマブをつくった人物。その完成までの道のりには多くの困難が待ち受けていました。

MEMO